高齢者の外出行動と座りスペース利用に関する研究

—品川区の場合—

TRAVEL BEHAVIORS AND USE OF SITTING SPACES OF THE AGED

—A case of Shinagawa ward—

大島 秀明*, 天野 克也**, 浅沼 由紀***, 谷口 汎邦****

Hideaki OSHIMA, Katsuya AMANO, Yuki ASANUMA

and Hirokuni TANIGUCHI

The purpose of this paper is to clarify the travel behaviors and the use of sitting spaces of the aged in the out-of-home. We conduct the questionnaire survey in Shinagawa ward promoting the project of OYASUMIISHI for the aged. The results are as follows: The aged highly esteem the importance of providing the sitting spaces in the going-out places: The travel frequency of the aged who have actually sat on the seats of OYASUMIISHI may become higher than the other: It can be said that the sitting spaces have an effect on urging the aged to go out.

Keywords : *the aged, travel behaviors, sitting behaviors, sitting spaces*

高齢者、外出行動、座り行為、座りスペース

1. 背景と目的

全国各地において従来から、歩行者空間の整備や歩行者のための街づくりに関する取り組みが行われているが、歩行行為を中心とした捉え方による計画が多く、歩行行為と座り行為を同時に捉えた計画は少ない。特に高齢者の外出については、若い世代と異なり長時間の立ち歩行行為が困難であり、外出頻度が減少する場合には身体機能の低下や社会的交流機会の減少等、様々な問題が生じる可能性が考えられる。座りスペースはバリアフリーの条件等とともに、今後の高齢化社会における環境整備として欠かせない条件であると考えられるが、高齢者の外出行動に関する既往研究等¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾においては、外出行動を座り行為との関係で捉えた研究はみられない。

既稿¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾では、美術館利用者を対象として座り行為と座りスペース利用の実態とその特性を捉えてきた。本稿では、高齢者にたいする座りスペースの必要性に着目し、高齢者の外出行動と座りスペース利用の実態及び座りスペース利用の外出行動への影響を捉えることを目的とする。そのために、高齢者を対象とした屋外における座りスペース整備事業を行っている東京都品川区を対象とし、高齢者の外出行動と座りスペース利用に関する調査をもとにその実態を把握し、既稿¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾とともに公共空間における座りスペース整備に向けた計画的条件を見出すための基礎的計画資料とするものである。

2. 分析の視点と方法

高齢者の外出行動に関する既往研究を概観すると、外出頻度の低下等による生活空間の縮小化、移動行動をもとにした外出行動範囲、外出の制約条件等を捉えるための実態把握、及び行動特性による外出行動の類型化、外出に影響を与える要因の抽出等を目的とし、交通手段及び交通特性、非高齢者との比較、個人属性としては年齢、就業の有無、家族構成等に着眼して分析が行われ成果が得られている。しかし、現状ではまだ実態解明の段階であり、外出のしやすさ、外出行動促進等に関する計画的条件を見出す段階に至っていない。

本稿においては、座りスペースを高齢者の外出行動をしやすくし、外出行動を促進するための1条件として仮定し、座りスペース整備事業としての具体的実施例として、「しながわお休み石」事業を行っている東京都品川区内の高齢者を対象として調査分析を行う。

品川区^{注1)}では、平成8年度のモデル実施をもとに、平成10年度から「しながわお休み石」^{注2)}(以後「お休み石」)事業として整備が行われている。「お休み石」は、足腰が少し弱った高齢者等が街を歩くときに、腰をおろしてひと休みできるスペースとして位置づけられている。また、それ以外の副次的効果として、一般の市民にたいしても散歩の途中での休憩や待ち合わせ等の利用に役立つことも想定され、調査時(平成13年10月)において129基設置されている。

* 大島建築設計 博士(工学)

** 武蔵工業大学建築学科 教授・工博

*** 文化女子大学住環境学科 助教授・博士(工学)

**** 東京工業大学 名誉教授・工博

Oshima Architectural Design Office, Dr. Eng.

Prof., Musashi Institute of Technology, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Dwelling Environment, Bunka Women's University, Dr. Eng.

Prof. Emeritus, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

本稿の分析における共通の視点として、「お休み石」事業の設置目的の対象であり、外出頻度を低下させると考えられる要因として、特に年齢と外出時における歩行状況の支障の有無（以後歩行状況）を主な比較評価要素として分析を行う。分析の手順及び分析項目、比較要素、分析指標、要因項目等を表1に示す。

高齢者の属性項目として年齢、歩行状況以外に、性別、就業の有無、家族構成を設定し、外出行動は仕事時以外の外出行動を対象とし、歩行時と乗物利用時に分け、外出頻度、外出場所（目的）、外出時間について実態を捉える。外出時の座り行為についても歩行時と乗物利用時に分け、外出先における座りスペースの利用実態と座りスペースにたいする重要度評価を分析する。座りスペースの外出促進への影響を捉えるための分析項目として、意識レベルとしての外出意向と実態レベルとしての外出時間の2項目について、「お休み石」利用と他の要因との影響度比較を目的として要因分析を行う。

表1 分析手順、分析項目等

分析項目	比較要素等	分析指標、要因項目等
1 高齢者の外出行動実態の把握 (歩行時、乗物利用時)	年齢、歩行状況	外出頻度、外出場所(目的)
2 高齢者の外出時座り行為の把握 (歩行時、乗物利用時)	年齢、歩行状況	座りスペース利用実態 座りスペース重要度評価
3 座りスペース整備による高齢者の 外出意向の把握		年齢、歩行状況、性別、家族構成 就業、外出頻度等
4 お休み石利用実態の把握 お休み石利用と外出意向、外出時間	年齢、歩行状況	お休み石認知度、利用実態 外出頻度、外出時間
5 外出意向の要因分析 お休み石利用の影響度の解明① (意識レベルの影響度比較)	数値化Ⅱ類による分析 外的基準:外出意向	年齢、性別、家族構成、就業 歩行状況、お休み石利用 お休み石認知、外出頻度等
6 外出時間の要因分析 お休み石利用の影響度の解明② (実態レベルの影響度比較)	数値化Ⅱ類による分析 外的基準:外出時間	年齢、性別、家族構成、就業 歩行状況、お休み石利用 お休み石認知、外出頻度等

3. 調査概要

品川区内にある全ヶ所の「お休み石」の現況を捉えるための予備調査として、位置、個数、形状等を把握した(図1、図2)。品川区内の高齢者世帯から各地域で無作為に60歳以上の高齢者2000人を抽出し、個人属性、外出行動、外出時の座り行為状況、「お休み石」にたいする認知、利用等を、郵送配布回収法によるアンケート調査により把握した。調査時期は平成13年10月と11月であり、有効回収数は423票(同回収率21.2%)である。

有効回答者の年齢、性別(図3、図4)は、60歳代が50%程度を占め、80歳代以上は12%程度である。性別は80歳代以上が男女ともに50%程度であるが、他は男性が60%程度を占めている。家族構成(図5)は、「本人夫婦のみ」の世帯が約40%程度で各年齢ともに最も多く、「一人暮らし」は10~15%前後を占めている。80歳代以上は、「本人と子供夫婦のみ」の世帯が35%程度を占め他の年齢と差がみられる。就業の有無(図6)は、60歳代においては「常勤」が40%程度を占めるが、高齢になるにしたがい就業者の比率は減少する。歩行状況を、歩行に全く支障のない人(以後不自由無)、何らかの不自由がある人^{註3)}(以後不自由有)に分け、図7に年齢別の比率を示す。高齢になるにほど「不自由有」の比率がやや増加し、80歳代以上は約20%程度、全体で約15%程度を占めている。

図1 しながわお休み石分布図

図2 お休み石事例

図3 年齢構成

図4 性別構成

図5 年齢別家族構成構成

図6 年齢別就業の有無

図7 年齢別歩行状況

4. 外出行動の実態（仕事時以外）

4.1 外出頻度

外出頻度を年齢別にみると（図8）、ほぼ同程度の構成比を示し、「ほぼ毎日」が約55%を占め最も多く、「週2～3回」についても約30%程度を占めている。歩行状況別に見ると（図9）、「ほぼ毎日」については「不自由無」が約60%を占めているが、「不自由有」は約30%程度で差がみられる。しかし、「不自由有」についても「週2～3回」以上外出する人の比率は、約75%程度を占めている。

4.2 外出時間

日常的な外出時間（以後外出時間）を、「外出にどのくらい時間をかけて出かけることが多いか」にたいする回答により求めた（図10～図13）。年齢別にみると、徒歩の場合は高齢になるほうが30分未満の比率がやや高くなるが、ほぼ同程度の構成比を示している。「30～60分未満」が最も多く、各年齢ともに約40%前後を占めている。乗物利用の場合は、「2時間以上」の比率が最も多く、高齢になるとやや減少するが、各年齢ともに60～70%前後を占めている。歩行状況別に見ると、徒歩の場合は、「不自由有」の30分未満の比率は約50%を占め、「不自由無」の約1/2程度であり差がみられる。乗物利用の場合においても、「不自由有」のほうが外出時間は短い。

4.3 外出場所（目的）

各外出場所（目的）^{注4）}を年齢別（表2）、歩行状況別（表3）に徒歩と乗物利用の場合に分け、それぞれ週1回以上、月1回以上における実態を把握した。徒歩の場合、年齢別、歩行状況別ともに、週1回以上の「散歩」、「買物」、月1回以上の「病院等への通院」、「食事、喫茶等」、「美容院・理容院」、乗物利用の場合は、月1回以上の「病院等への通院」、「美術館・展示会等」が多い。高齢になるほど週1回以上の「買物」が低下し、週1回以上の「図書館」及び月1回以上の「病院等への通院」が増加する傾向がみられる。

「不自由有」のほうが「不自由無」より比率が低い項目は、徒歩の場合、週1回以上の「散歩」、月1回以上の「買物」、「食事、喫茶」、「友人、知人への訪問」、乗物利用の場合、月1回以上の「買物」、「美術館・展示会等」、「友人、知人への訪問」、「親戚の家への訪問」である。また、「不自由有」の比率のほうが高い項目は、「病院等への通院」であり、歩行状況による外出行動の差がみられる。

図8 年齢別外出頻度

図9 歩行状況別外出頻度

図10 年齢別外出時間（徒歩）

図11 年齢別外出時間（乗物利用）

図12 歩行状況別外出時間（徒歩）

図13 歩行状況別外出時間（乗物利用）

表2 年齢別外出場所（目的）（有効回答者に対する割合 単位%）

外出場所（目的）	徒歩						乗物利用					
	60歳代		70歳代		80歳代以上		60歳代		70歳代		80歳代以上	
	月1回以上	週1回以上	月1回以上	週1回以上	月1回以上	週1回以上	月1回以上	週1回以上	月1回以上	週1回以上	月1回以上	週1回以上
散歩	19	43	17	41	32	48	9	8	8	4	14	8
買物	20	46	23	38	30	28	31	21	29	17	26	18
病院等への通院	28	16	33	10	38	10	29	7	23	7	26	6
食事、喫茶等	24	14	26	13	24	10	25	12	16	6	20	6
美容院・理容院	36	6	38	2	22	2	14	1	9	0	18	2
友人、知人への訪問	18	8	19	7	26	4	22	7	17	8	14	6
親戚の家への訪問	13	3	13	2	16	0	23	5	16	4	12	2
クラス会、同窓会等	7	0	7	1	4	0	15	2	16	2	14	0
町内会等の地域的活動	9	2	17	2	12	6	1	0	2	1	6	0
図書館利用	13	7	19	3	24	12	3	2	4	2	2	4
美術館・展示会等	12	2	10	2	8	4	23	4	25	4	30	2
観劇、音楽会、映画館等	7	0	5	0	4	2	22	5	24	2	16	4
稽古事や趣味	14	8	14	10	10	10	16	8	7	9	8	8
各種学校、研究会等	7	2	9	4	10	6	12	4	7	2	6	4
シルバー大学、クラブ	4	1	4	2	4	4	2	2	2	1	0	2
シルバーセンター等	4	3	10	2	8	6	2	0	1	6	2	2
スポーツ	9	13	10	5	6	18	11	7	10	6	12	6
スポーツ観戦	1	0	3	0	6	0	6	1	7	1	16	2
日帰りの行楽	2	0	5	1	8	0	13	3	17	4	16	4
娯楽、その他	6	2	18	4	12	2	6	3	7	4	14	4

表3 歩行状況別外出場所（目的）（有効回答者に対する割合 単位%）

外出場所（目的）	徒歩				乗物利用			
	不自由無		不自由有		不自由無		不自由有	
	月1回以上	週1回以上	月1回以上	週1回以上	月1回以上	週1回以上	月1回以上	週1回以上
散歩	21	44	16	31	10	7	7	7
買物	24	41	11	38	32	20	16	11
病院等への通院	31	12	33	18	24	5	38	18
食事、喫茶等	27	14	10	8	22	10	15	5
美容院・理容院	36	4	34	7	13	1	7	2
友人、知人への訪問	22	7	7	7	21	8	8	3
親戚の家への訪問	14	2	8	2	21	5	5	2
クラス会、同窓会等	7	1	2	2	17	2	2	2
町内会等の地域的活動	14	3	7	2	2	1	0	0
図書館利用	18	7	10	2	4	2	3	0
美術館・展示会等	13	2	2	0	27	3	11	5
観劇、音楽会、映画館等	7	1	2	0	23	4	16	3
稽古事や趣味	15	10	7	5	12	9	7	5
各種学校、研究会等	9	4	5	0	10	4	3	3
シルバー大学、クラブ	4	2	3	0	2	1	2	2
シルバーセンター等	7	3	8	3	1	1	3	3
スポーツ	10	11	5	0	12	8	0	0
スポーツ観戦	3	0	2	0	9	1	3	0
日帰りの行楽	4	0	3	2	16	4	5	3
娯楽、その他	12	4	5	0	8	4	5	0

4.4 「散歩」と「買物」からみた外出行動

4.3より徒歩の場合、週1回以上の外出行動は、「散歩」と「買物」の比率が高く、特に「散歩」は、座り行為との関係が考えられるため、これらの項目に着目し、日常的な外出行動を、「散歩」と「買物」ともに週1回以上（散歩・買物週1）、それ以外の散歩かつ買物（散歩+買物）、「散歩のみ」、「買物のみ」、「散歩買物なし」、の5つに類型化して各比率を求めた（図14、図15）。60歳代の「散歩・買物週1」が約20%程度で低く、80歳代の「散歩買物なし」が約30%程度で高いが、「散歩」と「買物」ともに行う人の比率は各年齢ともに40～45%前後である。「不自由有」の「散歩」と「買物」ともに行う人の比率は約25%程度であり、「不自由無」と差がみられる。図16注6)より、「散歩・買物週1」、「散歩+買物」の外出時間が長い。

図14 年齢別散歩買物行動

図15 歩行状況別散歩買物行動

図16 散歩買物行動別外出時間

5. 外出時座り行為の実態

5.1 座り場所

外出時の座り場所利用率を図17、図18に示す。年齢別(図17)では、徒歩の場合「公園・散歩道の椅子」、「公共施設内の椅子」、「喫茶店等の座席」、「目的地の椅子」等の利用率が高い。乗物利用の場合「駅の椅子」が特に高い。徒歩の場合80歳代以上の「目的地にある椅子」、「公共施設内の椅子」の利用率がやや高いが、他は年齢による差はみられない。歩行状況別(図18)の利用率は、徒歩、乗物利用ともに年齢別と同様の傾向を示している。「不自由有」の利用率の方が特に高い項目は、徒歩の「道端等の縁石」、乗物利用の「バス停の椅子」、「道端等の縁石」である。「道端等の縁石」は、「不自由有」の人が座りスペースがないために利用していることが考えられる。

5.2 座りスペースへの重要度評価

図19に、年齢別における座りスペース設置にたいする重要度評価を示す。ほとんどの項目において50%以上が「重要である」と回答し、「やや重要である」を含めると80%以上が重要性を評価している。しかし、「商店街」については他の項目と比較して著しく重要度評価が低く、「やや重要である」を含めた重要性評価は約40%程度である。年齢別にみると、「80歳代以上」において重要度がやや高い項目もみられるが、「60歳代」と「70歳代」についてはほぼ同程度であり、年齢による大きな差はみられないと考えられる。

歩行状況別(図20)にみると、「不自由有」のほうが全ての項目について重要度評価が高く、特に「駅」については約80%以上が「重要である」と評価している。したがって、歩行の不自由な人に対する座りスペース設置の必要性を確認することができる。

図17 年齢別座り場所(歩行、乗物利用)

図18 歩行状況別座り場所(歩行、乗物利用)

図19 年齢別にみた座りスペースの重要度評価

図20 歩行状況別にみた座りスペースの重要度評価

6. 座りスペース整備による外出意向

図21、図22は、「外出先やその途中で座り場所があれば、現在より外出しやすくなるか」にたいする回答であり、座りスペース整備による意識レベルとしての外出意向における、年齢別と歩行状況別の比率を示している。年齢別（図21）^{注6)}にみると、高齢ほど外出意向が高くなり、特に「80歳代以上」の現在よりも外出が増える人の比率は約50%程度を占めている。歩行状況別（図22）^{注6)}にみると、「不自由有」の外出意向は特に高く、現在よりも外出が増える人の比率は、「不自由無」は約30%であるが、「不自由有」は約70%を占め大きな差がみられる。

他の項目についても、図23～図27に外出意向を求めた。性別（図23）にみると、「女性」の「もっと多くなる」の比率が高いが、「変わらない」の比率は男女ともにほぼ同程度である。家族構成別^{注5)}（図24）にみると、「本人のみ」、「本人+他」の「もっと多くなる」の比率が高いが、「変わらない」の比率はほぼ同程度である。就業の有無別（図25）^{注6)}にみると「常勤」の「変わらない」の比率が高く約80%程度を占め、「非常勤」と「無職」の「変わらない」の比率はほぼ同程度である。外出頻度別（図26）にみると「毎日」の「もっと多くなる」の比率はやや高いが、「変わらない」の比率も約70%を占め高い。散歩買物行動別（図27）にみると、「買物のみ」、「散歩買物なし」の「変わらない」の比率がやや高い。

したがって、座りスペース整備による高齢者の外出意向への影響は、より高齢な人ほど、歩行が不自由な人ほど大きく、「常勤」よりも「非常勤」や「無職」の人のほう外出意向が高いことがわかる。

7. 「お休み石」利用実態

7.1 「お休み石」の認知度と利用率

「お休み石」の認知度は、年齢別（図28）にみると、各年齢ともに約40%程度である。歩行状況別（図29）にみると、「不自由有」の認知度のほうがやや高く、約45%を占めている。

「お休み石」を知っている回答者のうち実際に利用した回答者の比率は、年齢別（図30）にみると、高齢ほど利用率が高く、「80歳代以上」の場合は約60%近くが利用し、全体の利用率についても約47%程度である。歩行状況別（図31）にみると、「不自由有」の利用率のほうがやや高く、約57%を占めている。

7.2 「お休み石」の認知度及び利用と外出意向

「お休み石」の認知度別の外出意向（図32）は、「知っている」の「変わらない」の比率のほうが低く、外出意向がやや高くなる。

「お休み石」利用別の外出意向（図33）^{注6)}は、「利用あり」の外出意向が高く、「変わらない」の比率は約45%で低く、「利用なし」の「変わらない」の比率（約78%）と比較して大きな差がみられる。

7.3 「お休み石」利用と外出頻度、外出時間

「お休み石」の認知度と利用の有無から、知っていて利用した人（「利用あり」）、知っているが利用したことがない人（「利用なし」）、知らない人（「知らない」）に分類し、外出頻度比率（図34）を求めた。「知らない」の「週1回以下」の比率がやや高いが、ほぼ同程度であり、大きな差はみられない。外出時間については、日常的な外出行動との関係を捉えるため、徒歩の場合の比率を求めた（図35）^{注6)}。「利用あり」の外出時間が長く、「1時間以上」が約50%程度を占め、「利用なし」、「知らない」の各比率と差がみられる。

図21 年齢別外出意向

図22 歩行状況別外出意向

図23 性別外出意向

図24 家族構成別外出意向

図25 就業の有無別外出意向

図26 外出頻度別外出意向

図27 散歩買物行動別外出意向

図28 年齢別お休み石認知度

図29 歩行状況別お休み石認知度

図30 年齢別お休み石利用実態

図31 歩行状況別お休み石利用実態

図32 お休み石認知度別外出意向

図33 お休み石利用実態別外出意向

図34 お休み石利用実態別外出頻度

図35 お休み石利用実態別外出時間

8. 外出意向にたいする要因分析

「お休み石」利用の意識レベルとしての外出意向への影響を捉えるため、数量化理論第Ⅱ類による要因分析を行った（表4、表5）。

「お休み石」利用の外出意向にたいする影響度と他の要因項目の影響度の比較評価を目的とし、外的基準を（「外出が多くなる」＋「外出がやや多くなる」）と「変わらない」の2群に分け、各要因項目から独立性を考慮してアイテムを選定し分析を行った。

外出意向にたいする影響度は、歩行状況が最も高く、次に「お休み石」利用、就業の有無である。外出意向が特に高くなるカテゴリーは、歩行状況の「不自由有」、「お休み石」利用の「利用あり」の2項目であり、「お休み石」利用の外出意向にたいする影響度が大きいことを示している。また、性別、外出頻度の外出意向にたいする影響度は小さい。外出意向が高くなる他のカテゴリーは、就業の有無の「非常勤」、年齢の「70歳代」、「80歳代以上」、家族構成の「本人のみ」、外出頻度の「週1回以下」、散歩買物行動の「散歩+買物」、「散歩のみ」である。外出意向が高まらないカテゴリーは、「お休み石」利用の「利用なし」、就業の有無の「常勤」、散歩買物行動の「買物のみ」、歩行状況の「不自由無」、年齢の「60歳代」である。

表4 外出意向にたいする数量化理論第Ⅱ類による分析

アイテム	カテゴリー	データ数	カテゴリースコア				
歩行状況	不自由無	320					
	不自由有	47					
お休み石利用	利用あり	71					
	利用なし	74					
	知らない	222					
就業の有無	常勤	115					
	非常勤	55					
	無職	197					
散歩買物行動	散歩・買物週1	95					
	散歩+買物	72					
	散歩のみ	71					
	買物のみ	69					
	散歩買物なし	60					
年齢	60歳代	187					
	70歳代	145					
	80歳代以上	35					
家族構成	本人のみ	56					
	本人+他	68					
	夫婦のみ	147					
	夫婦+他	96					
外出頻度	毎日	200					
	週2,3回	112					
	週1回以下	55					
性別	男性	232					
	女性	135					
サンプル数		367	-0.5	0.0	0.5	1.0	1.5

注:カテゴリースコアはプラス側が「外出が多くなる」または「外出がやや多くなる」

表5 表4の各アイテムのレンジと偏相関係数

アイテム	レンジ	偏相関係数
歩行状況	1.8854	0.2756
お休み石利用	1.2778	0.2020
就業の有無	0.9974	0.1498
散歩買物外出行動	0.5923	0.0939
年齢	0.5898	0.1098
家族構成	0.5468	0.0789
外出頻度	0.3335	0.0577
性別	0.1722	0.0377
相関比		0.1893

9. 外出時間にたいする要因分析

8. より座りスペース整備による外出意向は、既に外出頻度が高い人よりも、現在外出頻度が低い人にたいして高まる傾向があり、

「お休み石」利用との関係についても図34、図35より、外出頻度よりも外出時間のほうが強いと考えられる。したがって、「お休み石」利用の実態レベルとしての外出行動への影響を捉えるための項目として、徒歩による外出時間を選定し、アイテムについては独立性を考慮して数量化理論第Ⅱ類による要因分析を行った（表6、表7）。8.と同様に、「お休み石」利用による外出時間への影響度と他の要因項目の影響度の比較評価を目的とし、外的基準を「30分未満」と「30分以上」の2群に分けて分析を行った。

外出時間にたいする影響度は、散歩買物行動が最も高く、次に家族構成、歩行状況、「お休み石」利用の順である。散歩外出行動の「散歩・買物週1」、「お休み石」利用の「利用あり」、家族構成の「本人のみ」のスコア値がプラス側で特に高く、外出時間を長くすることに寄与している。歩行状況の「不自由有」、散歩買物行動の「散歩買物なし」、家族構成の「本人+他」については、スコア値がマイナス側で特に低く、外出時間を短くする要因と考えられる。

表6 外出時間にたいする数量化理論第Ⅱ類による分析

アイテム	カテゴリー	データ数	カテゴリースコア				
散歩買物行動	散歩・買物週1	86					
	散歩+買物	62					
	散歩のみ	59					
	買物のみ	58					
	散歩買物なし	36					
家族構成	本人のみ	47					
	本人+他	54					
	夫婦のみ	118					
	夫婦+他	82					
歩行状況	不自由無	260					
	不自由有	41					
お休み石利用	利用あり	60					
	利用なし	63					
	知らない	178					
就業の有無	常勤	91					
	非常勤	48					
	無職	162					
年齢	60歳代	152					
	70歳代	123					
	80歳代以上	26					
性別	男性	187					
	女性	114					
外出頻度	毎日	166					
	週2,3回	98					
	週1回以下	37					
サンプル数		301	-1.0	-0.5	0.0	0.5	1.0

注:カテゴリースコアはプラス側が「30分以上」

表7 表6の各アイテムのレンジと偏相関係数

アイテム	レンジ	偏相関係数
散歩買物外出行動	1.4770	0.2158
家族構成	1.3074	0.1685
歩行状況	1.1784	0.1683
お休み石利用	0.9887	0.1500
就業の有無	0.7594	0.1084
年齢	0.4738	0.0986
性別	0.3901	0.0827
外出頻度	0.2875	0.0440
相関比		0.1663

10. まとめ

本稿は、座りスペースを高齢者の外出行動をしやすくするための1条件として位置づけ、高齢者にたいする座りスペース整備事業として「お休み石」事業を行っている東京都品川区を対象として分析を行った結果、以下の項目を明らかにした。

- 1) 高齢者の外出行動として、外出頻度と外出時間に関しては、年齢よりも歩行状況による差が大きい。しかし、歩行が不自由な人でも約75%の人が、週2、3回以上外出している。
- 2) 外出場所（目的）については、年齢、歩行状況にかかわらず、散歩、買物による外出が多い。他の外出場所（目的）については、より高齢な人ほど図書館利用が増え、病院等への通院は歩行が不自由な人、高齢な人ほど比率が高い。また、散歩と買物からみた外出行動については、歩行状況による差がみられた。
- 3) 外出時の座り場所については、徒歩の場合は公園等の散歩道の椅子、乗物利用の場合は駅の椅子の利用率高い。歩行に不自由のある人は不自由がない人に比べ、道端の縁石等の利用率が高く、座りスペースがないために利用していることが考えられる。
- 4) 座りスペース設置にたいする重要度評価は、年齢による差はみられず、公園散歩道、バス停、駅、公共施設内等においてはともに約60%の回答者が「重要である」と評価した。しかし、歩行状況別にみると差がみられ、歩行が不自由な人のほうが重要度評価は高く、歩行の不自由な人に対する座りスペース整備の必要性を確認した。また、商店街における座りスペース設置については重要度が低く、理由については今後の検討課題とする。
- 5) 座りスペース整備による外出意向への影響度については、歩行が不自由な人、より高齢な人ほど大きい。また、常勤で就業している人よりも、非常勤の人にたいする影響度が大きい。
- 6) 「お休み石」を実際に利用することは、外出意向にたいして影響度が高く、外出促進の効果が期待できると考えられる。外出意向の高まる要因項目は、歩行の不自由な人、非常勤の人、より高齢な人、家族構成別にみると一人暮らしの人（「本人のみ」）であった。
- 7) 「お休み石」利用は、徒歩による外出時間を長くすることにたいして、散歩買物行動や家族構成等とともに、高い影響度をもつことがわかった。高齢者が長時間の外出を行う場合は、「お休み石」等の座りスペースを必要とし、また座りスペース利用により外出がしやすくなり、より長い時間をかけた外出行動を促すと考えられる。

以上により、「お休み石」等の具体的な座りスペース整備事業の高齢者にたいする外出促進への有効性と、高齢者の生活圏内における適切な座りスペース整備の必要性を示しえたと考える。特に、80歳代以上の人、歩行の不自由な人、一人暮らしの人等にたいする座りスペース整備の有効性及び必要性が高いことが示された。

したがって、公共空間における座りスペースはバリアフリーに関する条件とともに、今後の高齢化社会を前提とした街づくり計画等において欠かせない条件の1つであると判断できる。さらに次の段階として、地区別による座りスペースの地域内の分布、個数、配置、形式、及び管理方法等については今後の検討課題とする。

謝辞

最後に、本調査のアンケートにご協力いただいた品川区の方々、

本調査にあたってご協力をいただいた品川区保健高齢事業部の方々、原田達也君（当時武蔵工大）に深く感謝の意を表します。

注

注1) 品川区は、平成13年1月1日現在において人口319,032人、老年人口は55,565人（17.4%）であり、幼年人口（9.9%）を上回り、少子高齢化が進展している。

注2) 平成7年、区政モニターと区長との懇談会の場で「お休み石」の提案がなされたことがきっかけとなり、平成8年度のモデル事業を経て、平成10年度から本格的に「お休み石」制度が実施されている。調査時において、座りスペース整備事業として実施されている他の事例は確認されていない。「お休み石」の形状は、スツール型、背もたれ付の1脚型、3人掛けのベンチ型の3タイプがある。

注3) 在宅において、身体上の理由、寝たきり等で全く外出できない人については、有効回答者数から除いている。

注4) 既往研究等（参考文献9）では、高齢者の外出行動は「散歩」、「買物」、「通院」が3大外出目的であると報告されている。今回の調査においても同様の結果が得られている。

注5) 図5より家族構成を、「本人のみ」、本人とその他（「本人+他」）、「夫婦のみ」、夫婦とその他（「夫婦+他」）の4タイプに分類している。

注6) 次の項目間において5%水準で有意差を確認している。

・外出意向については「もっと多くなる」と「やや多くなる」の合計比率について有意差を判定した。図21では、「60歳代」と「70歳代」及び「80歳代以上」、図22では、「不自由無」と「不自由有」、図25については、「常勤」と「非常勤」及び「無職」、図33では、「利用あり」と「利用なし」。

・外出時間については、「30分未満」と「1時間以上」の各比率について有意差を判定した。図16では、「散歩、買物週1」及び「散歩+買物」と「買物のみ」及び「散歩買物なし」、図35では、「利用あり」と「利用なし」及び「知らない」。

参考文献

- 1) 室永芳久、両角光男：熊本市における高齢者の外出行動に関する研究—1984年PT調査原データをを用いた分析—、日本建築学会計画系論文集 pp.168-175、2001.9
- 2) 浅沼由紀、谷口汎邦：中高年齢居住者の外出行動の特性について—高層・超高層住宅における高齢者のための生活空間計画に関する研究 その3—、日本建築学会関東支部研究報告集 pp.93-96、1991.3
- 3) 椎野亜紀夫、中村攻、木下勇、斎藤雪彦：高齢期における余暇外出行動の空間特性に関する研究、第35回日本都市計画学会学術研究論文集 pp.829-834、2000
- 4) 木村一裕、清水浩志郎、伊藤蒼志広：高齢者のアクティビティに影響を与える要因に関する研究、第34回日本都市計画学会学術研究論文集 pp.955-960、1999
- 5) 清水浩志郎、木村一裕、古山広功：積雪寒冷地方都市における高齢者交通の現状とその特性について、第23回日本都市計画学会学術研究論文集 pp.955-960、1988
- 6) 秋山哲男：高齢者のハンディキャップと外出特性に関する研究、第22回日本都市計画学会学術研究論文集 pp.547-552、1987
- 7) 中鉢奈津子：京都市における高齢者の外出行動、人文地理 第50巻第2号、pp.68-83、1998
- 8) 大杉昇：山村における高齢者の生活行動とその空間的パターン、地理科学 42-2、pp.82-95、1987
- 9) 秋山哲男：高齢者の住まいと交通、日本評論社 1993
- 10) 大島秀明、天野克也、谷口汎邦：美術館利用者の1日外出行動における座り行為の実態に関する研究、日本建築学会計画系論文報告集 pp.171-178、2001.12
- 11) 大島秀明、天野克也、谷口汎邦：公共美術館における利用特性からみた座りスペースと座り行為に関する研究、日本建築学会計画系論文報告集 pp.159-165、2001.7
- 12) 大島秀明、天野克也、谷口汎邦：立ち歩行利用からみた公共美術館における利用前後条件と座り行為に関する研究、日本建築学会計画系論文報告集 pp.141-148、2000.6

（2002年6月10日原稿受理、2002年10月25日採用決定）